月刊

こころのとも

第十五巻
四月号

愛・信・敬

誰も愛さない
誰も信じない
誰も敬わない

人を愛しなさい
人を信じなさい
人を敬いなさい

そうするとき
はじめて
幸せが訪れてくる

嘘つき政治家が手本

平然と
政治家いつも
嘘を言い
国民こぞって
お手本とする

鈍感と敏感

人のこころを
傷つけることには鈍感

自分のこころが
傷つくことには敏感

人生を考え直して
みたい人は（一二三）

―空海『即身成仏義』解説（二四）

（八）法然に薩般若を具足す

〔（八）―１　『大日経』の如来法身〕

「法然に薩般若を具足す」とは、『大日経』に云く「我れは一切の本初（ほんじょ）なり、号して世所依（せしょえ）と名づく。説法等、比無く、本寂（ほんじゃく）にして上有ること無し」と。

謂（いわ）く、我とは大日尊の自称なり。一切とは無数（むしゅ）を挙ぐ。本初とは、本来法然に是の如くの、大自在の、一切の法を証得するの本祖なり。如来の法身と衆生の本性とは、同じくこの本来寂静の理を得たり。然れども衆生は、覚せず知せず。故に仏、この理趣（りしゅ）を説いて、衆生を覚悟せしめたもう。

また云う、「諸（もろもろ）の因果を楽欲（ぎょうよく）する者、かの愚夫の能く真言と真言の相とを知るに非ず。何を以ての故に。因は作者に非ずと説けば、かの果も則ち不生なり。この因、因すら尚（なを）し空なり。云何（いかん）が果有らんや。当（まさ）に知るべし。真言の果は、悉く因果を離れたり」と。

上の文に引く所の、「我れ本不生を覚り、乃至因縁を遠離（おんり）せり」の偈、及び「諸法本（もと）より不生なり、乃至因業なり、虚空に等し」、是の如く等の偈は、皆法然具足の義を明かす。

解説的な現代語訳の金岡秀友訳・解説『空海即身成仏義』（太陽出版刊）から、引用させて頂きます。

＊　＊　＊　＊

次に、第五句「法然具足薩般若」について説明いたしましょう。

「法然に薩般若を具足する」の説明のために、初めに引用する『大日経』には、次のように説かれています。

「我れは一切の本初（ほんじょ）である。樹木が大地に依存するように、世間の全ての依り所であるから、名号（みょうごう）を世所依（せしょえ）と名づける。法身の覚り（自内証）の境地から語られる我が説法は、最も深い世界を説くのであるから、他に比較するものがなく、本来あるがままの寂静にあって、これ以上の覚りが

他にあるということはない」と（転字輪曼荼羅行品）。

この経文を詳しく説き明かしますと、「我れ」というのは、大日如来ご自身の名のり（自称）です。「一切」とは、有形・無形を問わず、全ての事物をいうので、枚挙にいとまのない「無数」をあげます。真実世界をその本体とする大日如来は、完全に滞りなく一切に遍満して、全てがそれぞれ本来あるがまま（本来法然）に、その大日如来の顕現である大自在の一切の法を実証し体得しているので、「本初」とは、それぞれの根本的祖、すなわち「本祖」を意味します。

大日如来の法身は、衆生の本性とは、同じくこの本来寂静の真実世界を生得しているのですが、衆生は、衆生それぞれの本質が真実世界である、ということを覚っていないばかりか、知ってもいません。ですから仏は、この道理の趣旨（理趣）を説かれて、衆生を覚らせるようになさるのです。

また、『大日経』に、次のようにいいます。

「もろもろの因果関係に執らわれる（楽欲）者がいるならば、その愚かな人は、法身によって語られる真実の言葉（真言）と、その言葉の内容（真言相）を知ってはいないのである。なぜならば、真言の教えでは、究極の根本原因（因）があって世界が始まっているのではなく（作者に非ず）、永遠の昔から時間・空間を越えて、全てが自在にかかわりあっている真実世界のありさまを説くのであるから、たとえ『因』といい、その『果』と名づけても、本質的には真実世界の現れであり、生滅を超越している（不生）のである。かりに『因』と名づけても、そこには固定的な『因』という実体があるわけではない（空）ので、どうして、それに起因する固定的な『果』などがあろうか。

まさにはっきりと、次のように知るべきである。真言の修行によって得られる覚り（果）は、一切に遍満している真実世界を本来あるがままに実証し体得するのであるから、固定的な因果関係を完全にはなれ、超越しているのであると」と（悉地出現品）。

まえに、「六大」の説明のところで引用しました『大日経』具縁品の、「我れ本不生を覚り、語言の道を出過（しゅっか）し、諸過解脱することを得、因縁を遠離せり」という偈文（げもん）と『金剛頂三摩地法』の「諸法本より不生なり、自性言説を離れたり、清浄にして垢染（くぜん）無し、因業は虚空に等し」という偈文なども、みな「法然に具足する」ということばの意味を明示しています。

＊　＊　＊　＊

お読み頂ければ、大体お分かりになられると思います。分かり辛いと思えるところを少し解説しておきます。

先ず、「薩般若を具足す」ということですが、これは、既に第十三巻（平成十四年）六月号で、私の理論に照らして解説しています。ご参照頂ければ幸いです。少しだけ復習しておきますと、「あらゆる人は、『他己』の髄識（神髄）に如来を宿していて、それが『自己』の髄識（精髄）の生命力と一体となる時、まさに仏の一切の智慧を体得することができる」ということです。

次に、分かりにくそうに思えますのは、『大日経』に説かれています次の部分です。「真言の教えでは、究極の根本原因（因）があって世界が始まっているのではなく（作者に非ず）、永遠の昔から時間・空間を越えて、全てが自在にかかわりあっている真実世界のありさまを説くのであるから、たとえ『因』といい、その『果』と名づけても、本質的には真実世界の現れであり、生滅を超越している（不生）のである。かりに『因』と名づけても、そこには固定的な『因』という実体があるわけではない（空）ので、どうして、それに起因する固定的な『果』などがあろうか。」という部分です。

私たち現代人は、科学が進歩したせいで、この世の全ての現象は因果の法則に従っていると思っています。なのに、ここでは、固定的な「因」もなければ、それに応ずる「果」もないとしています。なぜなのでしょうか。

なかなか理解して頂けないと思うのですが、例えば、こんな譬えは如何でしょうか。多くの人は、幸福になることを人生の目的としていると思いますが、そのとき、どういう条件（因）が満たされれば、幸福（果）と感じるか、が問題になります。ある人には、お金がたまることでしょうし、ある人には出世することでしょう。また、ある人にはとっては、家族と健康で仲良く暮らしたり、友達に恵まれることかもしれません。

しかし、悲しいかな、そうした条件（因）は、常に変動して止まないものです。ということは、「果」である幸福も常に変動するということになります。「因」としての条件に執らわれれば執らわれるほど、「果」としての幸福は危うくなるのです。

この世は、因果の法則で動いているようですが、実は、真実世界は不変なのです。幸福で言いますと、どんな条件であっても、不変な幸福に至ることが大切なのです。それは、絶対・不変な真実世界の現れとして、そう実感するのです。生きる喜び・生きる充実感が、勝手にわき起こってくるのです。そうした実感は、相対な世の中の因果の法則から言えば、それを超越していると言えるわ

けです。

このことを、現実の世界一般で言いますと、この世のあらゆる現象は、不変な真実世界の現れと言えるのです。これは、ある意味で全ての現象を肯定するということでもあります。

いま、イラク（イラクだけではありませんが）では、人間がお互いに殺し合う戦争が起こっています。この現実も、真実世界の現れとして肯定するのか、ということになりますが、とても残念なのですが、肯定せざる得ないのです。しかし、それを善しとしているわけではありません。肯定しているとは、真実の世界からみてその現実が的確に分かっているという意味で、そうなのです。つまり、人々が、真実世界から外れて、自己中心化していく世界情勢の一つのうねりとして起こっている、いうことが分かっている、という意味でそうなのです。

私は、そのうねりを止めて、人類を破滅から救おうと、ある意味で矛盾的に願っているのです。でも、それに執着しているわけではありません。

私の生き甲斐は、他者の幸せを実現することなのですが、現実は、とてもきびしく、私の願いはなかなか達せられそうにありません。そこが、悲しいのですが、でも、それが、仏の慈悲であり大悲であるわけです。現実にはなかなか達成されなくても、悲しみを抱いて、願い続けるわけです。しかもそれに執着しないでです。

もう一度、一般的な因果関係の話しに戻して検討してみたいと思います。

因果の法則は、実は、どこまでも、この日常的な「相対」な世界の話しなのです。それは、常に変化して止まないものです。例えば、私は物理学に不案内ですが、ニュートン力学は、絶対のように見えたようでも、アインシュタインの相対性理論によってその限界が明らかにされました。いま、民主主義は、最高の、あるいはベストではないとしても、ベターな制度だと考えられています。しかし、私から見ますと、グッドとさえ言えない、むしろワーストな制度なのです。でも、それが多くの人に分かるには、もう何世紀かかることなのでしょうか。

老子は言っています。「明るい道は暗くみえ、進む道は退くようにみえ、平らな道はでこぼこにみえます。高き徳は谷のように低くみえ、真白いものは汚れてみえ、広大な徳は欠けているようにみえます（以下略）」と。〔第五巻（平成六年）十一月号で取り上げています。ご参照頂ければ幸いです〕。

絶対・不変な真実世界に達すれば、因果を超えて物事の真実が見えてくるのです。

自作詩短歌等選

識者の空しい方策

虐待を
防ぐ方策
どこにある
対症療法
示しても
虐待へること
期待できない

ストレスがかかれば

ストレスが
かかれば「自己」が
へたり行く
「他己」のか弱き
現代人
意気は消沈
自殺を念慮

ある人の言葉

ある人が言う
「過去と他人は
変えられぬ
でも
未来と自分は
変えられる」と

過去は変わらなくても
その過去があるから
未来はある
そして
痛む過去も
自分のこころが
変わって
他人の過去のように
客観化することが
やがてできる

高校生の自己中心性

日米中韓の四カ国比較で
また日本の高校生は
親や教師への反抗を
自由とする比率が
ダントツに高かった

他の項目も合わせて
日本の高校生は
最も自己中心的だという

信仰を喪失し
民主主義のみを
生きる支えとする
必然の結果

真の教育が失われ
社会は崩壊へと向かう

死語と化す制度

いま若者に
言葉がない
格言・警句・箴言が
通じないという

そんなものどころか
法句経の言葉も
聖書の言葉も
死語と化したものが
どれほど多いことか

民主主義
全てのことば
失わせ
人をばエゴの
かたまりと
なせる制度と
はやく気付けよ

オウム事件再発可能性

オウム真理教が
起こしたような事件が
再び起こる可能性は
いまだに
消えてはいない

なぜなら
この民主主義社会では
人々の
寄る辺となるものが
利益と選好だけであり
〔快適性・利便性・
享楽性（欲望）〕
まじめに生き甲斐を
求める人たちの心を
満足させないからだ

その替わりに彼らは
自己に閉じて
他者を支配することに
生き甲斐を
感じてくるのだ

中国の腐敗問題

共産主義も
資本主義も
ともにエゴ追求制度

文化大革命で
儒教を否定した中国に
残るは
エゴ追求の制度だけ

役人の腐敗が
蔓延するのは当然

強者の為の政治

小泉もブッシュも
共に
強きを助け
弱気をくじく
政治をしている
と言われている

その共通のキーワードは
自由競争
市場原理至上主義

だから
弱肉強食は
この当然の帰結なのだ

何を為すべきか？

文化人
今の日本の
危うさに
気付けど何を
為すべきか
分からず過去を
見るばかりなり

日本文化の喪失は

伝統的な
日本文化の喪失は
他己の喪失による

民主主義は
自己肥大・他己萎縮を
招来し
過去を喪失させて
刹那に堕するから

自作随筆選

若者の自己中心化

三月二十九日付け産経新聞に次のような見出しの記事が載りました。「日米中韓４カ国　生活意識調査」「日本の高校生最も『自己中心』」「親、先生に反抗　『自由』ダントツ」

「えっ、これはいつの調査なの」とけげんに思って、読んでみますと、昨年の秋に行われたものだと分かりました。けげんに思った理由ですが、これらの結果は、これまでの似た調査と全く同じだったからです。

新聞に示された主な結果ですが、「先生に反抗する」ことについて「良くないこと」と答えたのはわずか 25 %。「本人の自由」（51 %）「悪いことではない」（20 %）とする回答は、他の３カ国に較べて群を抜いて高かったのです。

また、「親に反抗する」でも「本人の自由」が 55 %。「悪いことではない」（22 %）とともに突出して高く、逆に「良くないこと」は５人に１人しかなく、４カ国で唯一、過半数を割り込んでいるのです。

この他、「授業中にメールのやり取りをする」「学校をずる休みする」でも、よく似た結果で、日本が一番高い結果を示しています。さらに、「スーパーやコンビニで万引きする」「覚醒剤や麻薬を使う」「売春など性を売ったり買ったりする」などでも、アメリカに続き、他の２カ国を大きく引き離しているのです。

こうした結果に対して、この調査を実施した文部科学省所管の財団法人、日本青少年研究所の所長・千石保所長は、次のようなコメントを行ったようです。

「自分の意見や自己決定、自分らしさを尊重する日本の教育が浸透した結果と思う。」と。

新聞に載った調査結果が驚くべきものであることは、勿論ですが、所長のコメントにも驚かされます。日本の教育を肯定的に捉えておられると思われるからです。

私には、まさに「自分の意見や自己決定、自分らしさを尊重する日本の教育」こそが、問題だと思われるのです。

このことは、実は、作詞家・作家で有名な、阿久　悠氏が同じ産経新聞（三月七日付け）の「正論」欄で、次のような見出しで、述べておられたのです。「大人は若者に『言葉』を伝える努力を」「アフォリズムなき日本の不毛」。なお、この「アフォリズム」の意味ですが、

記事の中に「簡潔な形式の中に深い思考による真理を含ませた文。格言。箴言（しんげん）。警句。」とありました。

さて、この阿久氏の主張ですが、いま、日本の若者たちからこうした警句が一つも存在しなくなった、と嘆かれ、「驚愕すべき高校生の意識」と題して、次のように述べておられます。

「日本の若者、特に高校生が世界の中でもきわめて特異な存在であるということが、何かの調査で判明、それについてちょっと語られていた。たしか、アメリカ、中国、韓国の同世代との意識の比較であったと思うが、それはまことに憂慮すべき、いや驚愕（きょうがく）すべき結果であったように記憶している。（一部省略）たとえば、学校観、社会観、家族観、それぞれに対する質問でも、学校の価値を考えるとか、社会との関わりを思うとか、家族の意義を検証するとか、そういう姿勢が全くないように思えるのである。／ただ、自分の気分を答えとして出している。『別に』とか、『どうってことはない』という日常語と同じで、『今』と『自分』以外のものが思考の軸にない若者をどう見つめてあげればいいのだろうか。」と。

確かに、この方のおっしゃる通り、現代の日本の若者たちが、私の言葉で言いますと「他己（過去）」を喪失し、「自分」に閉じて「未来（将来）」も無くしているのです。そして、「今（刹那）」に落ち込んで、そこから抜けられなくなっているように思えます。こうした点で、私もこの方と同じ思いを持っているのです。

ただ、この方はこうなった原因として、次のように述べておられますが、この点で私とは全く異なっています。

「今の大人たちが、（一部省略）言葉を語ることに臆病になり、卑怯にも沈黙の道を選んだために、本来、飛翔（ひしょう）すべき、オリジナリティに満ちた格言、箴言、警句を命絶えさせてしまった」と。

でも、この意見には、私は、全く賛成しかねます。この方も、矛盾的ですが、この文章に引き続いて次のように述べておられます。

「今、言葉がない。誰も言葉を使わない。どのように饒舌に語彙数を積み重ねても、心を通過しないものは言葉とは呼ばない。（途中省略）警句にならない言葉は、美意識とも神との契約とも、まったく無縁の伝達記号である。」と。

この方も、「沈黙の道を選んだ」と言いながら、「饒舌」なほどの「言葉が心を通過しなくなった」と述べておられるのです。

沈黙どころか、現在ほど、人々が饒舌に語る時代はかつて無かったように思えます。例えば、テレビをつければ、どの局でも、さまざまな立場の方が、あらゆる事件について、様々にコメントをしています。新聞についても同様です。

「オリジナリティに満ちた格言、箴言、警句を命絶えさせてしまった」のは、大人が沈黙したからではないのです。大人を含めて、日本人全体が、他者の言葉を受け入れる心を失ったからなのです。

なぜ、そうなったのか。何度も何度もしつこく指摘していますように、それは、日本人が信仰を失い、民主主義のみを心の支えとしてきた結果なのです。

高校生が自己中心化したのは、太平洋戦争の終戦後からの60年近くにわたる日本のそうした民主主義教育のお陰（？）なのです。まさに前述の千石氏の言葉通り「自分の意見や自己決定、自分らしさを尊重する日本の教育が浸透した結果」と言えるのです。しかし、それは負の成果です。

この『こころのとも』の読者の方で、「釈尊のことば」をお読み頂いている方は、お分かりと思いますが、箴言や警句とも言える「釈尊のことば」の中にさえ、どれほど死語化しているものがあるか、驚くべきことです。

釈尊のことば（一三二）

―法句経解説―

（三九三）螺髪（らはつ）を結っているからバラモンなのではない。氏姓によってバラモンなのでもない。生まれによってバラモンなのでもない。真実と理法とをまもる人は、安楽である。かれこそ（真の）バラモンなのである。

テキストにしています中村元訳『ブッダ真理のことば感興のことば』（岩波文庫）の訳注には次のように書かれています。

「真実と理法をまもる人は・・・バラモンなのである―これはウパニシャッドにおけるサティヤカーマの物語と同趣意である。この精神は仏教においては特に強調された。『生まれによってバラモンなのではない。生まれによって非バラモンなのでもない。行為によってバラモンなのである。行為によって非バラモンなのである。』（『スッタニパータ』六五〇）（以下略）。」

この偈は、当時、身分制度（特にインドでのカースト制）が厳しかったことを考えますと、人をきわめて平等に扱っていたことが分かります。

誰でもが、「真実と理法をまもる」行為によってのみ、バラモンとなるということですので、きわめて平等であると言えますし、同時に人は行為によってのみ評価されるということでもあります。

私の理論でいいますと、人は、思い、為し、考える（言葉をもつ）のですが、思うことも考えることも、ともに為す行為によって表出されます。そういう意味で、行為で人を評価することが、大切になるわけです。

十善戒（①不殺生、②不偸盗、③不邪婬、④不妄語、⑤不綺語、⑥不悪口、⑦不両舌、⑧不慳貪、⑨不瞋恚、⑩不邪見）で言いますと、①～③が為すことを戒めるものです。この①と②は現代でも刑法で罰せられます。また、③は現在では死語化され、かつては罰せられましたが、現在ではほとんど自由になっていて、不道徳なことさえ、みなされないようです。

人を殺す行為は、「こころ」に憎しみをもっていることが、行為として表出されるわけですし、物を盗む行為は、「こころ」の情動のうちの食欲（物欲や金銭欲を含む）をコントロールすることができなくて、盗む行為として表出されるわけです。また、よこしまな男女関係を結ぶことは、同じく情動の性欲をコントロールできないことが行為に表出されるわけです。

さて、「真実と理法をまもる」とは、一体、どういうことなのか、検討しておきたいと思います。

まず、真実ですが、ここでは、「うそいつわりでないこと」といった普通の意味を超えていて、絶対な真理、つまり、解脱の境地に達したとき分かる絶対的な真実世界を意味しています。別の言葉で言いますと、「真如」といってもよいものです。

次の理法ですが、人が則るべき道理のことです。私の言葉で言いますと、「他己」に属することです。修行することで、真実に達することができるのですが、そうなるとき、自然と、理法が守れるようになれるのです。

こうして、真理に達し理法をまもる時、無上の「安楽」が訪れてくるのです。そして、釈尊の言われるように、「行為によってバラモン」になれるのです。

それが可能になるためには、「あたま」で理解してもだめで、「こころ」を磨くことが必要です。釈尊の教えを信じ、ひたすらに、修行しなければならないのです。

それは、現代人がもっとも苦手とするところです。自分で考え、判断し、決定することがよいことだとする民主主義教育では、決してそうなることはできません。

いま、世界中の人々が、自己主張に走り、そうなっています。

後記

一、桜の花も散りはじめています。みなさんの地方ではいかがでしょうか。

二、先月号で述べましたように、四国から岡山県に引っ越してきました。すべての引っ越し作業を自分たち家族でやっています。お手伝いをして下さった方も何人もありましたが、まだまだ、片づいていません。

三、前の所を、「終の住処」にしようと思っていましたので、いろいろなものを買い込み、物がとてつもなく増えてしまい、1トン半のトラックを買って、運んでいますが、もう何十回往復したか分かりません。

四、特に本は、約二十㎡の書庫、二つに一杯詰まっていましたので、それを箱に詰め、書架の棚を外し、書庫（物置）も解体して運び、再び組み立て、本を並べなおす作業をしましたが、とても大変でした。

五、それに、たいしたことはしていませんでしたが、農業もしていましたので、その道具や機材も沢山ありました。古い古い耕運機2台、ユンボ1台、その他、家財用も含め物置4個、パイプ車庫2張りなどです。

五、また、大学にも、十八年間勤めた鳴門教育大学時代も含めて集めた文献や研究資料、本などがあり、また、廃棄処分して頂いたパソコンなどで、トラック一杯では積みきれませんでした。

六、四月一日、美作大学で、辞令交付式があり、歓迎会がありました。新たな気持ちで、お役に立てればと思っています。

七、個人的な交遊ですが、先日、この「こころのとも」の題字を書いてくださった（今も使わせて頂いていますが）和歌山大学の教授で書家でもある矢萩冬菁先生から「万々歳」と、篆書（てんしょ）で書かれた色紙を頂きました。予期しなかったことでしたし、また、書が素晴らしかったことで、感動いたしました。この書を皆さまにご披露できないのが残念な位です。

月刊
こころのとも
第十五巻
四月号
（通巻
一七二号）

平成十六年四月八日
〒708―8511
岡山県津山市北園町50番地
美作大学　児童学科気付
（ひびきのさと　沙門）中塚　善成（ぜんじょう）

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名　ひびきのさと　口座番号01610―8―38660